水上勉「じじばばの記」

工藤　茂

姨捨のモチーフを持つ日本の古典文学及び口承文藝を、その内容から検討すると、そこには親棄畚型、難題型、闘争型、枝折型の四種類があることが分かる。このモチーフは、古典文学だけに停まることなく、現代文学にも流入してさらに複雑な様相をみせている。例えば、太宰治の小説「姥捨」、里見弴の小説「姥捨」は、いずれもそれを「甦りの場所」として再生してみせているし、堀辰雄の「姨捨」、井上靖の「姨捨」、深沢七郎の「楢山節考」などは、「姨捨へと促す女性像」を描いた小説となっている。村田喜代子の「蕨野行」も同様の小説だと言っていいのかもしれない。山本昌代の「でんでら野」、小池真理子の「姥捨ての街」は、都市空間に姨捨の場所を発見した小説であった。その他に、お伽話としての姨捨が登場し、エッセイの中にもそれを主題にした作品が現れた。水上勉の「じじばばの記」は、新藤兼人の「現代姥捨考」、柳田国男の「親棄山」と共にエッセイとして書かれたものである。ただし、柳田国男のエッセイ「親棄山」は他の二者と違って、過去の説話や伝説を対象に、その特色を述べたものであった。

ここでは、現代文学の中から水上勉のエッセイ「じじばばの記」を取り上げて、その特色を探ってみようと思う。

1

水上勉の「じじばばの記」は、短編集『三条木屋町通り』（昭和四十八年・中央公論社刊）に収められている。今私の手元にあるのは昭和五十年五月十五日刊四刷のそれである。その短編集の、昭和三十九年六月二十日の日

付けのある著者の「あとがき」には、〈「じじばばの記」は、『宝石』誌に「若狭姥捨考」として連載されたものを推敲してこの表題としたものである〉と記されている。昭和三十四年河出書房新社から出版した『霧と影』によって、新しい社会派推理小説作家と目された彼に、雑誌『宝石』からの原稿依頼があって書かれたものであろう。このエッセイは「爺取ろ婆取ろ」、「釈迦浜」、「桑子」、「まいまいこんこ」の四つの章によって構成されている。「爺取ろ婆取ろ」は山の姨捨、「釈迦浜」は海の姨捨、「桑子」は子捨て、「まいまいこんこ」は村の葬式について触れている。が、全て作者の郷里の伝承を記述したものではない。伝承あり、体験あり、想像ありといった方法でまとめられた随想と言っていい作品である。その底に流れているのは、現代の姨捨に対する水上の怒りに似た感情である。

最初の章「爺取ろ婆取ろ」で水上勉は、子供の頃、郷里で「山の神」と呼ばれて人々に恐れられていた、谷奥の山へ入ったミステリアス（不気味）な記憶を述べる。

彼の生まれた所は福井県大飯郡本郷村岡田であった。

私が少年時代に育った若狭の岡田部落というところは、山のうしろ側が若狭湾の海になっていて、部落は三方山に、まるで屏風を立てたようにかこまれた谷底にあった。ずいぶん暗かった。陽当りのわるいところは、一年じゅうキノコが生えている。太陽があっというまに沈んでしまうからである。南の方に扇面を尻すぼめにしたように田がのびていた。大川（佐分利川）に面したあたりで、かなりひらけた水田があった。そこだけは耕地整理された四角田もあったが、いったん谷がすぼまって、いくつもの襞を入りこんでゆくあたりの田畑はひどかった。上へゆくほどに小さくなり、泥田となった。

彼の母は〈その汁田とよばれる泥田に乳房のあたりまでつかって苗を植えた〉。そのような母の仕事を待つ間に、彼は「山の神」と呼ばれる谷奥の山に入った。そこで〈何やら白いものをみた。それは何かわからなかった。骨のようにもみえた〉。子供の時のその記憶が、大人になった後まで彼の内部には深く刻印されていて、忘れることができなかった。

その帰り路、子供の彼は母に聞く。

「山の神に白いもンが落ちとった。あれはなんや」

母は私をふりかえってにらむようにみた。しばらくだまっていたが、

「お前、山の神へ入ったンか」と静かに聞いた。

「うん、山へ入ったンや。暗いとこやった」

「あそこへ行ったらあかん。山の神さんに叱られるぞ……村の誰もが入ったことのない山や」と母はいった。

私は母の言葉が、かすかな恐怖をおびているのを知った。

この後、作者は書く。〈誰もが入ってはいけないところへ私は入っていたのだった〉と。

その後、彼は再び山の神に入ることはなかった。ただ、彼の眼の奥には、〈暗い藤つるのまきついた山の古木のあいまに、ばらばらとちらばって落ちていた骨らしい白いものの記憶〉が残っているだけだった。〈あれは人骨だったのだろうか〉と、彼は想像する。この想像は、彼に以下のような伝承を想起させるのだった。

私は後年になって、じじ取ろ、ばば取ろという言葉を聞いたことを思い出した。やはり部落で、大人たちがはなしているのを聞いた記憶なのだが、爺取ろ、婆取ろということは、いったいどういうことなのだろう。

そう考えて、水上はまた次のような想像をめぐらすのである。

蓑一枚ぐらいの汁田を耕さねばならない貧しい山村に、年老いた爺や婆が長生きするのはめいわくをかけるので、山の神さまが、七十をすぎた老爺、老婆を取りにきたのではあるまいか。とふっとそのようなことを考えるようになったのも後年になってからである。

つまり、作者は禁忌を犯して山の神に入って見た不気味な記憶と村の伝承を結びつけて、郷里の貧しい村にかつて姥捨の習俗が有ったのではないかと想像するのである。しかし、それはあくまでも想像であって姥捨の伝承ではなかった。むしろ、彼がここで真に書きたかったのは、この想像を入口にした、以下のような郷里の村に見

られる現代の姥捨の様相であった。
彼はまず、郷里の家における老爺老婆の位置を次のように紹介する。

戸口を入ると土間である。すぐ上りがまちがある。「お間」とよぶ板間がある。そこに炉がある。炉の周囲には莫蓙が敷きつめてあり、ここが一家団欒の「場」となる。囲炉裡は四角いから、薪をとる場所を「木尻」とよび、ここは、若い女房の位置になっている。その反対側に主人がすわり、子供は残った二方のもっとも広いところを陣取り、老爺老婆は木尻の隅にかくれたようにしてすわっていた。
そこは、土間を通して風のふき込む方角にあたる。いつも、水洟をたらし、老人たちは、若夫婦と孫たちの会話をうしろの方できいているのであった。
（略）
しかも、寝間は「納戸」とよぶ母屋の北側の隅の暗い場所にきめられていた。貧しい家は、この納戸には畳が敷かれていない。板の間だった。いいところで、莚がしかれてあるぐらいだから、この上にせんべい蒲団を敷いて寝ると、床の高い縁の下を吹く風音がきこえてくる。夜っぴいて、部屋じゅうが凍えた。

老人をこのような位置に置くことについて、作者は〈それにしても、風とおしのよい縁先の間を空間にしておいて、裏側のしめった納戸に老人たちを寝かせる習慣は、いつから出来たものか。惨酷な習慣といえぬでもない〉と言い、この納戸を現代における姥捨の場と見るのである。彼の記憶によれば、どの家も爺婆の最期は、この暗い陽の当たらぬ納戸であった。ある家の老婆が死んだ時、彼女は納戸の莚の上に敷いた布団に、枯れ木のように横たわっていた。枕元には洗面器や溲瓶が並んでいた。こうして、晩年の老婆は陽を見ることなくこと切れていたのだった。八十歳で死んだ著者の祖母も、その臨終の場は木小舎のような暗い古家の、しめった納戸であった。それゆえ小さい頃から作者は、〈年よりや、病人は、みなこの納戸に入れられて、寝て、やがて死ぬものだと思いきめていた〉のである。
後年、水上はこのような習慣から両親を守るために、

日当たりのよい離れの六畳間を造るように、身内に建築費を送った。ところが、久しぶりに帰郷してみて、その離れが生家の北側の奥まった薮かげに建てられているのに驚く。

「なぜ、もっと陽当りのいい場所に建てる計画をしなかったのか」

弟はだまっていた。それは村の習慣に逆らうことになるからといわぬばかりであった。

それに対し水上は、〈若狭だけでなく、田舎の家は、どうして、家の門口や庭先やの表まわりだけを飾りたがるのだろう。もっとも大切にしなければならない老婆老爺を冷たい隅っこの納戸に寝かせておいて、南向きに別棟の便所でもあるまい〉と思い、〈私には、この習慣なども、年をとれば人間は死ぬものであるから、死出の旅を急がせる仕組みに出来ているとしか思えない〉と批判する。

私は、ここに、彼がこの随想を書いた意図を推察するのである。

彼はさらに言う。〈爺婆の納戸は、棺桶の手前の座である〉と。

2

前節で述べた作者水上の執筆動機をさらに深く探ってゆくと、この文章の最終章「まいまいこんこ」に辿り着く。

「まいまいこんこ」というのは、葬式の時、引導をわたされた仏が棺の中で寝たまま、人々に担がれて阿弥陀堂の前で三べん廻される。それを見て子供たちがつけた名称だという。　この章で水上は、母方の祖母と父方の祖母の死について書いている。この二人の祖母の生き方というか、村人による生かされ方が水上にこの文章を書かせた動機ではなかったか、と私は考える。

私の母方の祖母である文左のお婆は、八十九歳まで生きて死んだのであるが、この祖母の死について考えてみても、私は現代の姥捨の様相を垣間見る思いがして慄然とする。

文左のお婆というのは、子供の時の作者をもっとも可愛がり、松尾（まつのお）詣りに連れて行ってくれた祖

母のことである。
松尾詣りというのは、若狭の西端にある青葉山の中腹にある古刹松尾寺に参詣しておこもりをすることである。彼はその途中で見た、箱のフタから頭の部分をのぞかせ、土まみれになって、雨露にさらされていた骸骨、よるべなき爺婆の死をまつる無縁塔の荒ぶれた光景を桑子の章に書いている。

この文左のお婆は、村あるきをして生活していた。村あるきとはもっとも貧しい家庭にあたえられる職業であった。それは区長の小使いをする役で、ふれごとを言って歩く役目だった。このお婆は台風が若狭を襲った時、土蔵で亡くなった。その死を彼は弟の手紙で知った。その晩は大変な大水だったので、お婆を安全だと思われる土蔵に入れ、古畳を敷いて一人で寝かせた。それがいけなかった。

〈その夜は案じながら、一睡もせず、家にいたわけです。翌朝、雨がやんだので、まだ水のたまっている村道をあるいて、お婆の家へゆくと、蔵の戸があいていて、お婆は死んでいました。古畳が水につかって浮いたらしく、お婆は天上にまで浮き上がって。畳と天上の間にはさまれて、死んだのでしょう〉と、弟の手紙は報じていた。この祖母の死への思いを、水上は次のよう述べている。

私はこの文面をこれ以上ここに記すことは出来ない。哀れな祖母の最期の模様を想像すると、腸が千切れるようなかなしみに襲われる。土蔵の中が安全だと思って、土蔵へはこび、畳を敷いて、その上にふとんをかさね、祖母を寝かした弟の処置はそれでよかったにしても、その後、山くずれと共に大水が出た時、土蔵に一度も見舞いにいってやらなかった本家の息子や孫たちの冷淡さもさることながら、土蔵に流れこんだ水が、八十九歳の祖母の躯ごともちあげて、天上につぎあげてしまった事情についてである。神経痛で足腰を悪くしていた祖母は、水が入ってきた時に、逃げることが出来なかったのであろう。畳にのせられたまま、土蔵の中で天上にせり上がってゆく断末魔に、いったい、誰の名を呼んで助けを求めたのであろうか。

引用が長くなるが、もう少し続けよう。

私は八十九歳まで村あるきをしてきた祖母のこの最期を思うと、祖母は不幸な生涯であったと思わないではおれないと同時に、京都から疎開してきていた若い者たちが、もう少し思いやりをかけてやれば、このような不幸から逃げられたのではあるまいか。土蔵にたえず気をつけていて、水が入ったことがわかれば、自分たちのいる母家へつれてきて、見守ってやるべきではなかったろうか。年よりのひがみから、歪んだ面を露骨に出して顔を見合わせるのもイヤがっていた祖母のことだから、娘たちは、そっとしておいてやったのだと、あとで語ったそうであるけれど、私は激しい憤りを感じずにはおれないのである。

ここに見えているのは、不幸な死を遂げた母方の祖母への作者の鎮魂の思いと、そのような死へと祖母を追いやった人々（作者自身をも含めた人々）への恨みと憤りである。と同時に、水上はそこに形を変えた現代の姥捨の様相を見ていたのである。

作者の父方の祖母、つまり、六左衛門の祖母は名をいしと言った。彼女は盲目で、八十二歳で亡くなったが、この祖母の晩年にも貧しさからくる不幸があった。いしは母方の祖母と同じように村あるきをしていた。盲目だったので彼女の村あるきには時間がかかった。この祖母に関する水上の記憶の中でもっとも悲しい思い出は、村の子らの悪戯がすぎて、二人が村なかの川に落ちて溺れ死にそうになった時のことである。

それは、村の麻むしの日の午後のことであった。祖母は子供の勉を背に負ぶって曲がりくねった洗い川の岸を歩いていた。

（前略）私と祖母が石垣の端（はな）へ顔を出すと、声がした。

「お婆、きたないがな、まん中に牛の糞があるぞ」

私が声の方をふりむくと、甚左の石垣の上に、まるで、烏がとまったように、五六人の子供たちが息を殺しておしだまってならんでいる。

私はびっくりした。と、この時であった。私は、祖母と一しょに、もんどり打って、川の中へ落ちこ

んでいたのだった。
祖母は「つとよ、つとよ」と見えない目で勉を捜すのだった。
それから三日目に祖母は寝ついてしまった。そして、やがて祖母の病気はひどくなった。発熱してうわ言をいった。医者がきた。老衰の上に風邪がこじれている。心臓が弱っているという診断だった。祖母はそれから四ヶ月も寝こんだ後、秋の中ごろに死んだ。作者の五歳の時であった。
〈祖母の死が、村の子らの悪戯によって、川へ落とされたという災禍から糸をひいたように、私の記憶の奥底には、まだ、その子らに対する憎しみが鮮明にある〉と、彼は語っている。そして、〈祖母は誰からも捨てられていた。父から、母から、子供らから、いや村の衆から捨てられていた、孤独な盲目の世界を一人で歩まねばならなかった〉のだと言う。〈駐在所が眼を光らし、殺人罪が適用される時代であるからこそ〉このように〈現代の姥捨は、様相をかえたのであるまいか〉というのが、水上の言わんとしたことだったのである。

3

山に老人を捨てる姥捨に対して、海に捨てる姥捨を書いているのが「釈迦浜（しゃかま）」の章である。〈山にも姥捨の道があったように、海にも姥捨の道があったということを知って、私は今でも、故里へ帰るたびに、釈迦浜の断崖をみると、手を合わしたくなる〉と、作者はこの章で述べている。
釈迦浜というのは、水上の郷里の近くにある和田の釈迦浜のことである。彼は土地の古老から、〈釈迦浜の下は、大きな穴になっておって、その穴は、若狭の下をくぐって、東の方に進み、長野の善光寺様の下まで通じとる〉と聞いた。そして、その底には〈世の中のもっとも恐ろしいもの、深いもの、暗いもの〉が集まっていると子供心に思っていた。
この釈迦浜に爺や婆を捨てにいったと著者が聞いたのは、後年のことであった。村の古老は、彼に次のよう話を聞かせてくれた。
「釈迦浜という名はありがたい名でな。これは、お釈迦様の住んどられる山じゃからそういうたもンじゃ。こ

の釈迦浜で死ぬとな、極楽往生が出ける。海に沈んでも、善光寺さんまでお詣りすることが出来るんじゃからの……爺婆がよろこんで死にたいと思うたのもわかるような気がするんじゃ……」

水上は右の話を聞いて、〈もし、大昔に、爺婆たちがこの岸壁に捨てられることを望んだものならば、ありそうなはなしではある〉と考え、以下の想像をめぐらすのである。

爺婆を舟に積んで釈迦浜まではこんだ人は誰であるかわからないが、家々の暗い納戸で寝ていた足腰たたぬ爺婆の耳へ、

「おじやん、おばん、釈迦浜へゆこ。釈迦浜には、仏さまが待ってござる。ほら耳すまさんか。お前をよんでござる音がする。ほら、善光寺様へ一しょに海底の道を通ってまいろうというてござる。どうじゃな。釈迦浜に早うにいって、お釈迦様と一しょに極楽まいりがしとうはないかな。おじやん、おばん。お前さえ承知なら、いつでも、釈迦浜へつれていったげるよ」

そんなことをささやこうものなら、若者たちに家をとりあげられて、奥の納戸の隅で、凍えるようなせんべい蒲団にくるまって寝ている爺婆たちは、現世の苦しみに耐えかねて、ふっと、そのささやきに乗らないともかぎるまい。

(略)粉雪の舞う釈迦浜に参りにきた爺婆は、うしろから、蹴落とされたかもしれない。波荒い釈迦浜の岩に頭を打ちくだいて、極楽往生したものだろうか。

右の箇所を読んでいて、私は南紀の補陀洛渡海のことを思い浮かべていた。海の彼方の聖地を求めて舟を漕ぎ出し、成仏するというこのモチーフは、井上靖の「補陀洛渡海記」という小説を生みだしている。水上の想像は日本海の補陀洛渡海、あるいは、そのバリエーションといった趣のものだと言っていいであろう。

4

深沢七郎が自作「楢山節考」に対して「みちのくの人形たち」を書いたように、姥捨は子捨てと対になってい

る。水上は「桑子」の章に姥捨と対をなす子捨てのことを書く。実は「まいまいこんこ」の章に、〈私は、今日、七十八歳の父と、六十七歳の母をもっている。つまり、この父母は、私を九歳の時に禅寺へ小僧に出して、私の扶養責任をのがれた両親であるが、私を寺へつき放した冷酷さにふるえると同時に、盲目の祖母に村あるきをさせた人たちだと思うと、さらに、かなしみのために、私の心はふるえるのである。〉と述べている。このように、水上自身が親に捨てられた子なのである。この悲しい現実が彼にこの章を書かせた所以であろう。ここには、貧しさゆえに子を捨てる親の悲しみと、捨てられる子の悲しみがある。水上は言う。〈幼年時代に古老から聞いた「桑子」のはなしは、いってみれば、「爺取ろ婆取ろ」とは逆に「子ォ取ろ」の部類に属する話であって、これとても、一種の「まびき」のはなしとしては捨てがたかった〉と。

若狭あたりの桑畑の、その畑のまん中には、あいている大きな穴があった。穴は、壺のようになっており、へりをたたき固めた跡がはっきり見られた。子供だった水上はそれを見て足をこわばらせた。底には蛇や、鼠や、イタチの死骸が落ちていた。子供たちは、この穴はとちなんぴん（むささび）の食糧倉庫だと親たちから教えられた。実はこれが赤子を捨てた桑子の壺であったのだ。

貧しい家は、子だくさんでは生きてゆけない。だから、三男四男がうまれると、これを捨てたものだ。つまり、臍の尾が切れてまなしに、母親からひきはなして、桑畑の中へ捨てにゆくのである。産婦には、子は寿命がなくて死んだと告げるわけだが、赤子を捨てにゆく任務を背負ったのは爺婆であったろうか。

こうしてよけいな子は桑畑に捨てられた。たまには元気な赤子がいて、夜のうちに這いあがり、桑の落ち葉の上で泣いているのを見かけることがあった。こうした子は桑子と呼ばれ、即座に家に持ち帰り、長男、次男より大事に育てられたという。

〈このような「まびき」が警察にきこえても、内々にすまされたのは、今から思うと不思議でもあるのだが、当時の貧しい村の生活ぶりを見るに見かねた駐在所が、これを見て見ぬふりをしたというのも理解出来ないこと

ではない〉と、作者はその感想を書きつけている。また、爺婆が子捨ての役割を担ったことに関しては、〈爺婆は、若い嫁がごろごろと年子を産むのを見るに見かねて、その苦衷を察して、捨てに行ったのである〉と想像し、〈これは爺婆が、かつて、自分たちが若いころにしてもらった思いやりを次の代に返したことになる〉と、その意見を述べているのであった。

5

姨捨説話は外国から流入したものが、在来の説話と融合して日本化し、現在に至ったと考えられている。その背景にあるものは、現在の社会では想像の難しい村の人々の貧しさであろう。その貧しさゆえの姥捨、子捨てに悲しい思いをはせて出来上がったのが、水上勉の「じじばばの記」であった。彼は自己の体験と郷里での経験を基にして、それに想像の場面を交えてこのエッセイを書いている。その主題は、姿を変えて残っている現代の姥捨への批判であった。